

2011 年度 第 40 回 いしかわインテリアデザイン大賞 「大賞」

物件名	素材の小宇宙 鮎みつ川		
	所在地	金沢市	
設計者	小笠原 幸一 小笠原計画研究所		
	TEL		URL



素材の小宇宙

東山 鮎 みつ川

《東山の小さな古い町家を鮎店に変えた保存と再生の改修抄》

『過去の光とつながる』……[蝶]や[とんぼ]の羽根を通過する光線。春霞の中の一重、二重…八重に咲きほころびる桜花をくぐりぬける光…。その効果は、平安期十二単のかさねをも髣髴させる。古来より、光がもたらす心理作用は大きく、ことに室内の内部空間においてこそ絶大だった。手漉き和紙の網代編み込み天井を通過した無数の光線は、和紙の繊維を越えて射し込むうちに、フィルターに濾過された水の様な、淡くてやわらかな肌理をもつ。

過去から時空を超えて現代に届いた光の微粒子は、内部の空間に小さな宇宙観を醸し出し、息づきながら、何かを語りかけているようにみえる。

『路地とつながる』……通りの路地から格子戸越しに玄関土間、客席、板場までもが見通せ、一体的につながり合うことで、「東山界隈の情緒の連続空間」として展開される。

『町並とつながる』……茶屋街の町並に溶け込み同化しながら、千本格子の木虫籠（きむすこ）越しに見える内部空間までもが町並に参加することで、内部と外部に対話が生まれ、「町並に奥行きと風情」を醸し出していく。

『大地とつながる』……床に敷き詰められた小松産の観音下石（かながそいし）は、現在では産出されていない銘石。壁に重ね塗られた京都の本聚楽土や、造作材の高山遠野檜、天井和紙の原料の加賀楮（かがこうぞ）、暖簾の材料の新潟・小千谷本麻など、風合いの良いそれらの「地域素材は希少な大地の恵み」といえる。

『人とつながる』……木虫籠越しの路地を行き交う人の気配と客席、横に向き合う客席と客席、正対する客席と板場は、心地よい距離感を保ちながらも、対話的な配置構成をとることで、鮎の妙を要としながら、豊かで穏やかな「コミュニティの輪」が形成される。

『伝統の技とつながる』……町家建築における、家具職人の技の代名詞ともいえる階段筆筥を、修復し再構成しながら、現代用途に堪える階段と収納機能を併せ持った家具をつくる事で、廃れようとしている「職人の伝統技術」を甦らせる。

『わび・さびとつながる』……兼六園・夕顔亭の茶室の小空間に見るような、床の間や障子のあかり窓などの繊細で閑な設えを、更に小さなトイレのスペースに、「寛ぎと癒しの極小空間として再構成」する。

『つながることで生み出されること』……過去の「光」とつながり、「風土」や「人」とつながり、伝統の「技」や「美意識」とつながることで生み出された、ささやかな「地域文化の結節点」を、新たな現代の内部機能に昇華させ再構築することで、確かな未来へ向けた新しい『金沢ならではの環境デザインとしてのインテリア空間の創出』をめざした。

2011 年度 第 40 回 いしかわインテリアデザイン大賞 「石川県知事賞」

物件名	おしゃれメッセ 2010、SUTEKI かなざわ工芸物語		
	所在地	金沢市	
設計者	飯尾 豊 STUDIO YUTAKA		
	TEL		URL



別添

【展示の基本コンセプト】

展示会場は新しく OPEN した「しいのき迎賓館」のギャラリー A と B。

近い場所とは言え会場が 2 ヲ所に分散する為その関連性やストーリー性が必要。

そこでそれぞれの展示コンセプトを：

・ギャラリー A --- 新しく開発した商品のみを展示し出展者名は大きく表示しない。その商品の持つメッセージをひらがな一文で表示した。

- | | |
|------------|--------|
| ① 岩本清商店 | 「なごみ」 |
| ② 箔座株式会社 | 「きづかい」 |
| ③ (株) 今井金箔 | 「もてなし」 |
| ④ (株) 能作 | 「おもいで」 |
| ⑤ 九谷焼 鏑木商舗 | 「かたらい」 |
| ⑥ (株) 箔一 | 「しつらい」 |
| ⑦ よしが浦 | 「よそおい」 |
| ⑧ 加賀染振興協会 | 「い き」 |
| ⑨ 九谷焼 諸江屋 | 「あそび」 |
| ⑩ 林仏壇店 | 「わ ざ」 |
| ⑪ 金銀箔工芸さくだ | 「つつみ」 |
| ⑫ 山田仏具店 | 「いのり」 |
| ⑬ 桐漆工芸上坂 | 「くつろぎ」 |
| ⑭ 石川県染物商工業 | 「つどい」 |

・ギャラリー B --- 出展した社名、団体名を表示し、金沢を代表する従来商品を展示。出展したそれぞれの企業 PR の展示とした（商品はこちらで選定）

- | | |
|------------|--------|
| ① (株) 能作 | 「金沢漆器」 |
| ② 九谷焼 鏑木商舗 | 「金沢九谷」 |
| ③ 桐漆工芸上坂 | 「桐工芸」 |
| ④ 金銀箔工芸さくだ | 「金沢箔」 |
| ⑤ (株) 今井金箔 | 「金沢箔」 |

- | | |
|------------|--------|
| ⑥ よしが浦 | 「加賀繻」 |
| ⑦ (株) 箔一 | 「金沢箔」 |
| ⑧ 加賀染振興協会 | 「加賀友禅」 |
| ⑨ 九谷焼 諸江屋 | 「金沢九谷」 |
| ⑩ 箔座株式会社 | 「金沢箔」 |
| ⑪ 岩本清商店 | 「桐工芸」 |
| ⑫ 山田仏具店 | 「金沢仏壇」 |
| ⑬ 林仏壇店 | 「金沢仏壇」 |
| ⑭ 石川県染物商工業 | 「加賀友禅」 |

それぞれの表示は t3 のグレースモークアクリルに白のカット文字で加工した。

【展示に留意した点】

1) 両展示会場の出入り口はそれぞれ 1 箇所であり、入り口、出口が共用である。その為、入場者に展示コンセプトがダイレクトに伝わるように展示台は全て入り口に対して正面を向いていて、ギャラリー A、B、はその位置関係から展示台は対峙して向かい合うレイアウトとした。

2) 狭い空間に 14 社分の展示台（平台）をレイアウトし、尚且つ入場者が入った瞬間に展示品のヴォリューム（存在感）が分かるようにジグザグの配置を基本レイアウトとしてスタートした。しかし平台のスペースは□800 と狭く、その後壁面にレイアウトした展示商品に関してスペースの調整を行った。

（特別仕様の展示台を 6 台製作した、その場合でも□800 を原則とした）

また展示品の殆どが小物である事から、平台の高さは目線に近い H900 に設定。

3) 表示パネルにグレースモークアクリルを採用し、薄暗い空間に白文字が浮いて

いるように見せると同時に、その透明感が向こう側の展示品や人の気配を認知出来る事によって、入場者を奥の展示品まで誘導する事を狙った。

- 4) ギャラリー A の奥の壁面には出展者、デザイナーなど商品開発に携わった総勢 18 人のコメント（一人約 20 秒）を 8 分間の映像に編集しエンドレスで流した。モニターではなく、壁面と言う事から入場者が奥の展示台まで足を運んで映像、及び展示商品を観る、と言う一つの狙いが有った。

- 5) ギャラリー A,B ともに狭い空間（天井も低い）の為、暗い空間に柔らかい光で展示商品を浮き上がらせる展示を狙った。またギャラリーのカーペットがグレーの市松模様だった事も会場を暗くして目立たなくする目的もあった。



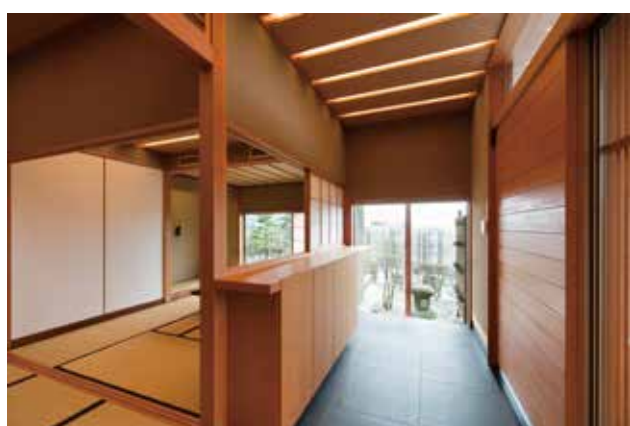
ギャラリー A



ギャラリー B

2011年度 第40回 いしかわインテリアデザイン大賞 「金沢市長賞」

物件名	玄牝の関		
	所在地	金沢市	
設計者	平口泰夫 (株)平口泰夫建築研究室		
	TEL		URL



■ 玄牝の関

『老子』の第六章に「谷神不死 是謂玄牝 玄牝之門 是謂天地根 綿綿若存 用之不勤」とあります。書き下すと「谷神は死せず。これを玄牝という。玄牝の門、これを天地の根という。綿々として存するがごとく、これを用いてもつかれず。」となります。

現代語的に訳すると『万物を生み出す谷間の神は、とめどもなく生み出して死ぬ事は無い。これを私は「玄牝—神秘なる母性」と呼ぶ。この玄牝は天地万物を生み出す門である。その存在はぼんやりとはっきりとしないようでありながら、その働きは尽きることは無い。』ということです。

「玄関」とは日本では、鎌倉時代に禅宗で用いられた仏教語であります。「玄」は奥が深い悟りの境地を意味します。「関」は入口のことです。ですから「玄関」は「玄妙な道に入る関門＝玄牝の関」、つまり奥深い仏道の入口を意味しました。「玄関」は建築的には、日本では書院造・禅寺の客殿や方丈などの出入り口として造られました。住居に書院造りが普及し始めた江戸時代以降に、住宅にも玄関が設けられるようになったようです。

「住む」の同訓に「棲む」、「栖む」がありますが、「生活・居住する」という意味と、「建築の世界に生きる」といった領域に身を置く意味や「動物が巣をつくって生息する」あるいは、妻問婚の時代に「男が夫として女の家に通う」といった意味もあります。「住居」は女が支配的な向きがあります。

「玄関」は「悟りへの入口」＝「道への入口」。では「道」とは「体系」、王朝時代から管弦のこと

を「糸竹の道」と表現し「芸の体系」というほどの意味でありました。中世から近世にかけて、思想・哲学的背景、修行や日常生活の場において形而上的な問題を如何に生かし高めるかという問題が含まれたようです。「住む道、生きる道、仏の道、武士の道、建築の道、芸の道……＝道を外してはならないの道」です。仏教では「道」は「空」に繋がります。「空」は空虚ではありません。「無限の働き」があるのです。その根源が「玄牝」なのであります。

「玄関」の語源がそうなのだから、住宅には似つかわしくないで、そうした「呼称」は止めましようとの機運が高まった時期もありました。

当「石引の家」ではその語源のイメージを思い巡らして「玄関」を創ってみました。

住居のなかで仏壇のある部屋を仏間といいますが、冠婚葬祭では表口となる縁側に近い畳の間に配することが多いようでした。現在では縁側のない住居もあり、玄関近くにもうけられたりです。「仏」さんや「神」さんは祭りなどに降りて来てもらい、直会など一緒に飲食する習わしのように、皆が集う空間に祀るのが宜しいのです。

「茶道」も主客の一体感を旨としています。

そこで当計画は、「仏」「神」「道」「主」「客」交歓の「場」を「玄関」という想定で計画しました。ここでは、平面で指す「ホーチ」「エントランス」「エントランスホール」「畳廊下」「和室6畳」「水屋」「トイレ」「前庭」「デッキ」の総体を「玄関」と称します。それぞれ「格子戸・襖・障子」といった間仕切りの建具の開（open）閉（close）で様相が幾つにも変わります。機能も「茶室」「仏間」「直会の間」「客間」などなど変容します。前述の「無限の働き」を意識しての計画です。